

教師・歴史学者・社会科教育学者が協働した授業のゲートキーピング（2）

– P4C を用いた歴史教育実践：移民を考える–

Gatekeeping for social studies lesson practice collaborated on teachers,
historian and social studies pedagogy researcher 2
-Teaching history based on the methodology of “Philosophy for Children”-

辻本 諭¹ (Satoshi TSUJIMOTO)

田中 伸¹ (Noboru TANAKA)

三浦 寛之² (Hiroyuki MIURA)

Abstract

This paper is a result of collaboration among teachers, historians, and social studies pedagogy research to design, practice, improve, and validate social studies history lessons. In this study, we constructed the practice of history education centred on personal interpretation by utilizing thinking-processes and methods pertinent to the learning of history. Thought processes pertinent to historical studies were incorporated into history classes by: 1, personally interpreting past events based on historical records; 2, establishing critical communication with others; and then 3, interpreting them for oneself once again.

The modern nation-state is an ‘imaginary community’ formed by drawing an artificial boundary between ‘us’ and ‘others’. Internal integration of the ‘us’ and differentiation from the ‘others’ are continuous processes. However, immigrants are originally ‘others’ and later become a part of ‘us’. Nation-building aims to help visualise (and sometimes facilitate) this process. Immigrants are inseparably linked to modern world history, and it is pertinent to reflect on their characteristics. Therefore, this research aims to: (1) understand modern history by combining Japanese history and world history; (2) gain multiple perspectives on history, (3) enable cross-disciplinary learning, and (4) develop empathy for learning objects and independent learning. To this end, we developed a history education lesson to reflect on immigrants using the p4c learning strategy, which analyzes events from multiple perspectives based on dialogue. Specifically, we utilised the following thinking processes and methods pertinent to learning history: 1) personally interpreting past events based on historical records; 2) establishing critical communication with others; and 3) reinterpreting past events. This study is the result of collaboration between teachers and historians, and uses social studies pedagogy research to design, practice, improve, and validate social studies history lessons.

Keywords: History Education, Social Studies Education, Gatekeeping, immigrant, Philosophy for Children

概要

本論文は、教師・歴史学研究者・社会科教育研究者が協働し、社会科歴史授業をデザイン・実践・改善・検証する方法論を示す継続研究である。本研究では、歴史授業内に、歴史学的に思考する手続き、すなわち①過去の出来事を史料に基づき自ら解釈する、②他者と批判的なコミュニケーションを行う、③その上であらためて自ら解釈を行うという3点を含みこむことで、歴史学の思考・方法を活用した解釈を主体とする歴史教育実践を構築する。

本研究では、①日本史と世界史を接合した近現代史理解、②歴史に対する複眼的視点、③領域横断的な学び、④学習対象への共感と主体的な学び、を目指すテーマとして移民を取り上げる。近代国民国家は「われわれ」と「他者」との間に人為的な境界線を引くことで成立した「想像の共同体」である。そこでは内部の統合と外部との差異化が不断にはかられるが、移民は元来「他者」でありながら、「われわれ」の側に参入していく存在であるがゆえに、この国民形成のプロセスを可視化（時には促進）する役割を果たすことになった。移民が近現代の世界史と不可分に結びつき、またその特質を映し出す存在であることに着目し、本研究では対話を原理として事象を複眼的に分析するp4cを用いて移民を考える授業を実施し、その効果を検証した。

キーワード：歴史教育、社会科教育、ゲートキーピング、移民、p4c、歴史学者、社会科教育学者

¹ 岐阜大学教育学部

² 岐阜県立岐阜高等学校

1. 問題の所在-「耳を傾ける」歴史教育実践-

本研究は、「耳を傾ける」実践である。「耳を傾ける」とは、イングランドの社会学者レス・バッックが仮説的に示した考え方である¹。氏は、コスモポリタンであるロンドンの日常をフィールドとし、特に労働者階級を対象とした参与調査の中で、そこにおける人種、民族、ジェンダー、都市文化、サッカーなどにみられる思想を捉え、分析し、暴きだす。そこで一貫して用いた方法論の一つが「耳を傾ける」である。これは、対象へ想像的に関心を向けることで、目前の事象において何が問題になっているのか、またその事象の中にある断片がどのように大きな問題へと繋がっているかを考えることである。バッックは「個人史をより大きな社会的・歴史的諸力へと結びつけること、またその人々の生を構成する社会的、経済的、政治的諸力の中で生じる公的な問題へと関連づけること」を通して「もしその聞き取りがなければ関心を向けられなかつたはずの、しかしそれでもなお注目されるべきものを、それは探す行為である」と論ずる。すなわち、「耳を傾ける」目的と方法を端的に示すと、目の前の事象へ想像的に向き合うことで、そこにみられる問題性を捉え、暴き、自らの立ち位置を反省的に捉えることである。バッックは、これが現在求められている理由として「排除される人々、見過ごされる人々を受け入れること、すなわち、「場違い」だとされる人々に所属の感覚を与えること」の必要性を指摘する。

教育実践における「耳を傾ける」とは、大きく2点である。第1に、扱う対象を自明視せず、その対象が持つ社会的な意味を考え抜くことである。例えば、地域社会におけるさまざまな伝統文化。これは、何者かが「文化」や「価値あるもの」とみなすことでそれは伝統文化となりえる。もちろん、そのものの実態にも価値があり、産業的に重要なものであろう。しかし、それが「伝統」や「文化」として成立するためには、そこに他者からの視点や評価が存在する。それが絡み合うことでその対象は社会的な意味が付与される。この相互関係を考える必要がある。

第2は、その考えるプロセスにおいて、他者と対話をすることである。例えば、特定の価値や意味を一方的に受容させるための実践であれば、それは必

要ない。一定の思想や価値観を伝え、それを受け入れることを強いるのみである。しかしながら、目前の事象と向き合い、その問題性を捉え、暴き、それにより自らの立ち位置（考え方、思想、見方・考え方・価値観等）を反省的に捉え直す場合は、そこに他者の存在が必要である。授業の中で様々なそれに触れることで、「排除される人々、見過ごされる人々を受け入れること」が可能となり、対象に新しい意味を吹き込むことが出来る。もちろん、ここで示す「他者」とは、子ども間はもちろん、教師と子どもの間にある認識や理解、捉え方のズレも含まれる。両者のズレを自覚し、それを授業へ応用することで様々な見方や価値観、思想の対話をを行うのである²。

本研究が対象とする歴史教育実践は、近年、調査研究からこの「耳を傾ける」ことの重要性が様々明らかになっている。例えば、バートンとレヴスティックは、子どもが持つ歴史認識・歴史理解の傾向と課題・問題点を事前に調べ、彼らの思考パターンを捉える必要性を指摘する³。例えば、教師は子ども達が持つ歴史的事象への理解を捉え、彼らがどのような過程でそれらに対する一定の理解を持ったのか、また、その認識を強固する作用を及ぼす教科書記述や博物館、地域教育の場など、複合的に彼らの認識形成過程を捉えてゆく必要性を論じる。また、彼らは歴史を学ぶ際の子どもの能動性をも調査対象とし、歴史の分析・解釈、博物館訪問、歴史談義等に対しての興味関心、及び能動性を調査している。そこでは、学習やインタビュー調査などの様々な文脈で新しい歴史解釈に出会った際、彼らがその情報を蓄積するのか、分析するのか、解釈するのかなど、情報に対する彼ら自身のスタンスも調査する⁴。従来は、多くの米国社会科教育研究者が指摘する通り、社会諸科学を基盤とした教科内容を重視する教科論が席巻していた。しかし、子どもの認識や動機と社会科学習の相関関係が明らかにされたことで、米国社会科教育研究の論理が大きく変容している。それらの研究を引き受け、歴史教育及び歴史教育実践に関する研究は大きく進展し⁵、また国内でも子どもの価値観や前理解を踏まえた歴史教育実践の研究が多く

数行かれている⁶。

そこで、本研究では、テーマとして設定した事象に向き合い、それを対話を用いて読み解き、子ども一人一人が考える解釈や視点を交差させることで、事象に「耳を傾ける」ことを目指すものとした。バックが示すこの概念は、参与調査により直接耳を傾けることを重視する。本研究ではこの概念を歴史教育へ応用させる。その方法論は、後に説明をする *Philosophy for Children* である。

なお、本研究は、授業を教師・歴史学の研究者・社会科教育学の研究者の三者が協働しデザインする過程と実際を示す継続研究である⁷。教師は、多様な歴史解釈や歴史教育論の乱立を踏まえ各種資料や文献を用いながら目前の子どもを見ながら中長期的な教育目標を踏まえ、日々の授業を主体的にデザイン・調整・実践するゲートキーパーである。本研究では、社会科教師が歴史学と社会科教育学の専門家と共に歴史授業をデザイン・修正しながら授業をゲートキーピングする経過を示すことで、授業デザインの方略、及び教育現場と専門研究領域のコラボレーションのありかたの一つを示すものである⁸。

2. なぜ移民について考えるのか—歴史研究者の視点から—

本章では、歴史研究者の視点から、歴史学・歴史教育それぞれにおいて移民というテーマが持つ意義について検討する。まず移民に関する近年の歴史研究について概観した上で、その成果を歴史教育にどう活用できるのか、そこにどのような意味があるのかについて考える。あわせて、本授業実践で用いる資料についても解説する。

（1）近現代移民についての歴史研究

歴史上、国を越えて移動する人々は時代・地域を問わずつねに見られたが、近現代の移民は、移動する範囲、また人口規模の点で前近代と明確に区別される現象であった。それは、19世紀後半以降の世界史がしばしば（国際）移民の時代という言葉で表現されることにも表れている。すなわち、16世紀に始まったグローバル化が本格化し、あらゆる国・地域が欧米を中心とする「世界システム」に組み込まれていく中で、文字通り地球規模での人の移動が活発化した。興味深いのは、これが各地における国民国

家形成の動きと並行していた点である。周知のように、近代国民国家は「われわれ」と「他者」との間に人為的な境界線を引くことによって成立した「想像の共同体」である。そこでは内部の統合と外部との差異化が不斷にはかられていくことになるが、移民は元来「他者」でありながら「われわれ」の側に参入していく存在であるがゆえに、この国民形成のプロセスを可視化する（時には促進する）役割を果たすことになったのである。このように、移民が近現代の世界史と不可分に結びつき、またその特質を映し出す存在であることに注目して、これまでに多くの歴史研究が生み出されている⁹。

19世紀後半から20世紀半ばにかけては、日本からも多くの人々が海外へと移動した。開国後、高度経済成長期までの日本は明らかな移民送出国であり、その移住先は、帝国内（台湾、朝鮮、満州など）、北米（ハワイを含む米国、カナダ）、南米（ブラジル、ペルー、ボリビアなど）、東南アジア、南洋諸島に及んでいる。歴史学界において、こうした近現代日本人移民への関心は高く、彼らが日本および定住先の国の歴史においてどのような意味を持っていたのか、またその経験がいかなるものであったのかについて、政治、経済、国際関係、法、文化、教育、エスニシティ、ジェンダー、記憶・表象など多様な観点から研究が進められている¹⁰。また当事者／関係者の著作も多数出版されており¹¹、これらの成果を利用するこことにより、移民をテーマとした歴史学習を行うことは十分に可能である。

（2）学習テーマとしての移民

次に、歴史教育において移民を取り上げる意味（学習を通じて何を学ぶことができるのか）について考えてみたい。なお、ここでは検討対象として19世紀後半から20世紀半ばまでの日本人移民（とその子孫）を、教育段階として高等学校を、それぞれ想定している。

①日本史と世界史を接合した近現代史理解

まず、日本人移民に注目することによって、日本史と世界史を接合する形での近現代史学習が可能となる。たとえば、移民が海外に向かう理由と彼らの定住先での経験を説明するためには、日本国内と海外の状況を結びつけて理解する必要があり、また移民の遭遇を巡って日本と移住先の国・地域との間に

しばしば外交問題が発生した（日米関係のようにその後の歴史展開に重大な影響を及ぼす場合もあった）点に目を向ければ、日本と世界の関係史という視点が自ずと導かれることになる。

こうしたメリットは、現在の高等学校における歴史教育、とりわけ 2022 年度に新設される「歴史総合」の目標—世界史と日本史の融合、現在と結びつけた歴史理解（ゆえに近現代史が学習対象となる）—と合致している。実際に、次期学習指導要領（平成 30 年告示）においても、取り上げられるべき学習テーマの例として「移民」（ただし日本人移民に必ずしも限定されない）への言及が繰り返し見られる。

②歴史に対する複眼的視点

日本人移民について学ぶことはまた、複眼的な視点で歴史を捉えることに繋がる。移民は国を越えて移動する越境者であるがゆえに、受入国・送出国のいずれにとっても「他者」とならざるをえず、双方との関係性がつねに問題となる。時代状況により移民に対する受入・排除の論理や彼らに対する処遇は変化し、またそれに応じて移民の経験も多様であるが、そこには少なくとも、移民当事者、受入国（社会）、送出国（社会）の3つの視点が存在するのである。学習においてはそれぞれの視点に目を向けることで、歴史が複数の主体によって作られること、そしてどの主体に着目するかによって歴史の語りが異なったものになることが確認されるはずである。

同時に、移民の中の多様性にも目を向けたい。近年の研究では、移民の経験が、彼（女）らの出身地、社会層、教育・文化、年齢、性別などにより異なっていたこと、それゆえに日本人移民を一括りにして論じることの問題性が指摘されている。ここからも、歴史を語る上で主体を特定することの重要性を学ぶことができる。以上の点はまた、現在の歴史教育において重視される「比較、相互の関連」や「多面的で多角的な考察」にも繋がるものである。

③領域横断的な学習

すでに見た近年の歴史学の研究動向によく表れているように、移民に関わる論点は多岐にわたるが、その中には、自己・他者認識、差別と人権、国家主権と住民自治、ジェンダーなど、公民科の内容に関連するテーマが多く含まれる。この点に注目すれば、日本人移民の経験を題材にしてこれらの問題にアプ

ローチする領域横断的な学習が可能だろう。たとえば、第二次世界大戦時の米国で日本人移民およびその子孫に対してとられた強制収容政策について、差別と人権の観点から分析したり、同政策に対する移民側の理解・対応のズレ（協力か抵抗か）を、彼（女）らの多様な自己認識のありようから考察したりする学習が考えられる。また、19世紀末から20世紀初めにかけて日本人移民の中に多数見られた「写真花嫁」と、彼女たちを巡る日米間の摩擦について、恋愛・結婚観を含めた両国の文化や価値観の違いから考えてみることもできるだろう。

なお、学習指導要領には、地理・歴史・公民の各領域で習得する視点を必要に応じ組み合わせて用いることの重要性が指摘されている。この点からすれば、上記のような領域横断的な学習にはもっと積極的位置づけが与えられてよいのではないだろうか。

④学習対象への共感と主体的な学び

学習テーマとしての日本人移民はまた、学習者が共感をもって取り組みやすい（学びへのモチベーションを得やすい）という点に重要な意味がある。歴史（特に世界史）学習においては、学習者に異なる国・地域への関心をどう抱かせ、主体的な学びを実現するかが大きな課題であるが、海外に移住した日本人（その出身地は日本全国に広がり、各地に関連する事物や資料を見出すことができる）の経験を取り上げることは一つの有効な手段となりうるだろう。

また近年、日本における外国人労働者とその家族の数は（少なくともコロナ禍が発生するまでは）確実に増加してきた。このように「移民」の存在が、また彼らに関わるさまざまな問題が身近なものとなっている現在において、日本人移民の歴史は、学習者にとって自身と繋がりのある（自分の経験をもとに語ることのできる）テーマであると考えられる。

米国史家の貴堂嘉之は、排外主義やマイノリティへの差別が世界的な広がりを見せ、日本も決して無縁とはいえない現在の状況を踏まえて、「近代日本のアメリカ移民の歴史—初期移住、排日運動、強制収容、442 部隊の歴史経験、モデルマイノリティー—そのものが、『いまの日本』を考える最良の教材となるであろう」と述べている。日本人移民という学習テーマは、近しい過去の教訓を引き出すことで学習者に、自身が属する社会の現状を見つめ未来について

考るよう促す可能性を秘めているといえる¹²。

（3）教材として用いる資料

本授業実践では、19世紀後半から20世紀半ばまでの間に米国に渡った日本人移民の歴史を取り上げる。特に、彼らの第二次大戦時における苦境（すなわち、母国である日本と移住先である米国が敵対し、どちらに忠誠を誓うのか選択を迫られるという状況）に注目する。この選択に伴って移民たちの中に生じた苦悩・葛藤がどのようなものか、またそれが何に起因しているのかを具体的な事例をもとに議論する。学習者にできる限り主体的な関心を持つてもらえるよう、そして多面的・多角的な考察が可能となるよう、本実践にあたっては3つの資料（①～③）を準備した。以下では、それぞれの資料の内容と、教材として用いる理由について簡単に説明する。

①貴堂嘉之『移民国家アメリカの歴史』岩波新書、2018年、第4章

本書は、建国から現在までの「移民国家」としての米国の歴史をわかりやすくまとめた通史である。最大の特徴は、従来の通史では十分に取り上げられてこなかったアジア系移民を分析の中心に据えている点、また「移民国家」という理解のもとで総じて見逃されてきた、米国史に一貫して存在する移民制限・排除のベクトルに光を当てている点にある。資料としたのは、開国から第二次大戦期までの日本人移民（とその子孫）について扱っている第4章である。学習者には、この資料を通じて米国における日本人移民史の概要が提示される。

②ジョン・オカダ（川井龍介訳）『ノーノー・ボーイ』旬報社、2016年、16～56頁

本書は、第二次大戦によって大きな苦難に直面した、米国シアトルにおける日本人移民家族の経験を二世の視点から描いた小説（フィクション）である。同じく日系移民二世である著者ジョン・オカダは、開戦後、米国軍に志願し対日戦争に従軍した人物で、作中では彼自身の経験・見聞が随所に生かされている。物語の概要は、大戦中、米国軍の徴兵を拒否して収容所に入れられた主人公が、戦後、国家への不忠誠者として周囲の（とりわけ同じ日系人の）厳しい視線にさらされ苦悩するというものである（「ノーノー・ボーイ」という呼称は米国軍への忠誠登録を拒否した二世を表す）。実は、主人公が忠誠拒否をし

た背景には、日本の正義と勝利を信じて疑わない母親の存在があり、彼はその後自身の決断をひどく後悔するとともに、日本人であることを決して捨てようとしている（そして息子にも日本人であることを強要する）母親に絶望と憎しみを募らせている。この母子関係を軸に、父と弟、複数の友人も含めた主人公の人間関係が丁寧に描かれている。そこで強調されるのは、戦争によって引き起こされた移民たち一人ひとりのアイデンティティの揺らぎと、それに起因する彼らの人間関係への深刻な打撃であり、学習者にはこの点を読み取り、自ら解釈していくことが期待されている。

③TBS開局60周年5夜連続特別企画『99年の愛—Japanese Americans』2010年、Ⓐ第2夜（1:40:40～1:47:15）とⒷ第3夜（1:24:00～1:33:40）

本DVDは、②と同じく米国シアトルに農業移民として定着を果たしたある日本人移民家族の歴史を、特に親世代（一世）、子ども世代（二世）それぞれが経験した差別や苦難と、彼らがそれをいかにして乗り越えたかに焦点を当てて描いたドラマ（フィクション）である。物語は、移民当事者たちが2010年現在から過去を振り返る構成がとられ、現在の米国における日系人の確固たる地位や日本との友好関係の裏にどのような過去が存在するのかを視聴者に考えさせる内容となっている。資料としたのは、Ⓐ第二次大戦開戦時に、両親と息子たちの間で—立場（国籍・価値観）の違い、またそれに伴って身の処し方が異なることから—すれ違いと葛藤が生まれる場面、Ⓑ大戦中、強制収容所において一家に忠誠登録が課され、回答を巡って二世の息子たちが思い悩む場面、の2つである。学習者には、移民たちが問い合わせ続けた、米国において自分は何者か、どうすれば自分は受け入れられるのかという問題について考えてもらうことが意図されている¹³。

3. 授業デザイン・実践・実践後の検証

（1）授業デザイン

本実践は、2019年2月に岐阜県立岐阜高等学校の2年次日本史Bの授業にて実施した。実施クラスは2年次生ということもあり高等学校で近現代史を学習しておらず、本単元はこれまでの既存の知識と資料をもとに実施した。授業を実施するにあたって、

歴史学・社会科教育学の専門家とともに資料や授業方法を検討し、指導案を作成した。指導案作成における歴史学習の原理は、P4Cである。P4Cとは、社会問題や論争を対話を通して探究する場を構築する授業モデルである¹⁴。P4Cを歴史学習の原理として用いた理由は、歴史学習で課題となっている学ぶ意義を見いだせない歴史学習を脱却することにある。社会系教科の目的は、民主主義社会を主体的に形成する市民性の育成にある。このような資質を育成するためには社会へ主体的に関わり、参加する能力や態度が求められる。歴史学習においても、単に過去

の出来事を学ぶものにとどまるのではなく、過去の出来事を通して現代社会について探求する学習へと転換することで、市民性育成の一助となり生徒が学ぶ意義を見いだせるものとなる。以上のような理由から、本実践では日系移民の歴史を題材とし、そこから生まれた問い合わせに対して生徒が持つ既存の知識や価値観を活用しながら対話をを行うことで、生徒自身の見方や考え方を広げることを目標とする授業を開発・実践した。実際に実施した指導案を示すと以下のようになる。

実施した指導案

教科（科目）	地理歴史（日本史B）	単元名	日系移民の歴史
本時の主題	対話を通じて移民やアイデンティティについて考える。		
導入	○資料の提示・確認	○歴史資料を事前に読み日系移民についての知識を得る。 日系移民とはどのような存在だったのだろう？	資料：①②③（本稿2(3)に要点を掲載した資料） 各自で資料の読み取り。
	○本時の活動の提示	○ビデオを視聴し日系移民の具体的なイメージを獲得する。 ○本時の活動を提示する。 対話を通じて移民やアイデンティティについて考えよう。	・ワークシートの配布
展開	○問い合わせの作成 ○対話へのファシリテート	○移民やアイデンティティに関する問い合わせを生徒自身で立てる 移民やアイデンティティに関する問い合わせをそれぞれ考えよう。 ○グループで対話する問い合わせを決定する 移民やアイデンティティに関する問い合わせの中からグループで対話する問い合わせを決めよう。 ○グループで決定した問い合わせに対して個人で探求する グループで決定した問い合わせについて個人で考えてみよう ○問い合わせに対してグループで対話する。 問い合わせに対してグループで対話しよう。	・問い合わせの決定→グループ議論→全体議論を通してワークシート記入をする。
まとめ	○対話内容の発表とまとめ	○グループでの対話内容を発表する。 それぞれのグループの対話の内容を発表しよう。	・ワークシートの記入

(2) 授業実践の実際

まず、事前準備として授業当日までに歴史資料を読み、各自資料をもとに移民やアイデンティティに

関する問い合わせを自由に立ててもらった。当日の授業では、文献資料のみでは当時の移民についてのイメージが湧きにくいことが考えられたため、導入部

で動画（『99年の愛』）を視聴し当時の様子を具体的にイメージさせた。その後、展開部では資料をもとに個人で複数の問い合わせを作成した後、グループで対話したい問い合わせを1つ決定した。そして、グループで決定した問い合わせについて対話を行った。最後に終結部でグループごとに問い合わせと対話の内容についてプレゼンを行った。

（3）授業の考察

本実践は、歴史資料を手段とし生徒が主体的に問い合わせを立て、他者との対話を通して現代社会に対する見方・考え方を広げることに注目している。そのため、以下では生徒が作成した問い合わせの内容や対話の過程、そして対話を終えた後の生徒の感想に注目して分析を行い、授業の妥当性を検討したい。

①生徒による問い合わせの作成

生徒一人一人が資料をもとに作成した問い合わせは以下のようなものであった。

＜個人で作成した問い合わせ＞

- ・名誉白人になろうとした当時の日本人の思いとは？
- ・移民家族の中で考えに違いがあるのはなぜか？
- ・日本人がアメリカ兵として戦う意味とは何か？
- ・アメリカで育った日本人はアメリカ人なのか日本人なのか？
- ・なぜ少数は排除されるのか？
- ・移民を下に見る考えはなぜ自然に湧いてくるのか？
- ・大衆の意見と異なるとなぜ差別されるのか？
- ・なぜ日本の中だけで雇用の問題を解決できないのか？
- ・差別意識というものを根本的に取り払うためにはどうしたらよいか？
- ・移民やその子孫のケアのためどう働きかけていく必要があるか？
- ・過去のアメリカとの対立を受けて現代の私たちは外交問題とどう向き合っていくべきか？
- ・移民と自国民とのバランスはどのようなものがよいか？
- ・戦時中の移民に対する扱いはどの程度が正しいのか？
- ・日本の移民政策は、歴史的なことを踏まえて対策がとられているか？
- ・日本は移民を白人として西洋人と対等に扱われることを望んだが西洋と同じになることは日本人の尊厳を守ったといえるのか？
- ・マイノリティであることとアイデンティティを確立して

いることを分けるものは何なのか？

- ・移民2世にとって故国はどこなのか？
- ・日本人とは何か？（血・場所など）
- ・今の日本は移民を積極的に受け入れるべきか？
- ・グローバル化は日本に恩恵をもたらすか？
- ・2世も日本人としての誇りを持つのか？
- ・なぜ日本政府はもっと積極的に移民を救助しようとしたのか？
- ・2世の日本人はアイデンティティを確立できていたのか？
- ・なぜ多くの2世が入隊を希望したのか？
- ・現在の日本の移民に対する政策は歴史的に見て妥当か？
- ・移民が国内で増えることの危険性とは？
- ・日本人の「the日本人」以外への偏見が多いのはなぜか？
- ・移民の居場所をどのように確保するか？
- ・なぜ私たちは憎しみ合うのか？
- ・なぜ日系2世はアメリカのために最前線で戦うことができたのか？
- ・1世と2世はなぜここまで違うのか？（国籍の重要性）
- ・日本人とアメリカ人の違いの定義とは何か？
- ・移民は国民なのか？
- ・移民と元の住民との扱いの違いはどのようにあるべきか？
- ・移民の定義とは何か？
- ・人種差別をなくすことは可能か？
- ・なぜ人々は国を出ることを決意するのか？
- ・もし世界が一つの国だった場合、世の中はどうなるのか？
- ・移民のアイデンティティは国籍に依存するのか、生まれた国に依存するのか？
- ・移民2世以降の人々は完全な現地人となるのか？
- ・移民たちにとって移住先と祖国の間にはどのような思いがあるか？
- ・なぜ人々は人種差別をするのか？
- ・今後日本の移民受け入れはどうすべきか。
- ・奴隸解放後であるのになぜアメリカで人種差別があるのか？

上記から、生徒の問い合わせは大きく、①「当時」の移民について問い合わせを立てているもの（例：日本人がアメリカ兵として戦う意味とは何か？、2世も日本人としての誇りを持つのか？）、②「現代」の移民について問い合わせを立てているもの（例：現在の日本の移民に対する政策は歴史的に見て妥当か？、移民と自國

民とのバランスはどのようなものがよいか?)、③移民を手がかりとし別の概念について問い合わせを立てているもの(例:なぜ少数は排除されるのか?、マイノリティであることとアイデンティティを確立していくことを分けるものは何なのか?)などであった。歴史資料から単に過去の出来事として日系移民を理解し、新たな問い合わせを作成するだけでなく、現代社会の移民問題や移民とは別のテーマへと視点を発展させた問い合わせを作成していることがわかる。

②グループによる問い合わせの決定

上記のような問い合わせの中から、生徒はグループで次のような問い合わせを設定し議論を行った。

<グループで設定した問い合わせ>

- ・○○人(国籍)とは何なのか?
- ・少数への差別がなぜ起こるのか?
- ・戦時下における移民の処遇はどうあるべきか?
- ・血と生まれた場所が異なる移民はどう分類されるのか?

グループで設定した問い合わせは、出された問い合わせそのまま選択せず、各グループで問い合わせを検討し、再構成したものであった。各グループが選択した問い合わせは「当時」の移民について考えるものではなく、「現代」の移民に関する問題や移民を手がかりとし別の概念や問題について考えるものであった。すなわち、生徒は日系移民に関する歴史を過去の出来事として理解し対話するのではなく、日系移民に関する歴史を手段として現代社会の事象や問題について対話をすることに意義を見出していることがわかる。

③対話後の感想

各グループでの対話後の感想を取り上げると以下のようなものがあった。

・少数への差別がなぜ起こるのか?

授業前までは、少数意見が尊重されていない民主主義の矛盾は民主主義が完全でないからとしか考えていましたが、今回のグループ討論を通じて、それは民主主義自体の性質なのかもしれないという新たな考え方も芽生えました。だからといってどうして中間層(支配者と支配者が見下す対象にした人の間)が下のほうへ流れていかないのか、少数も尊重できる民主主義よりも優れた性質をもった政治体制はないのか、といった疑問も残っています。これらについてもこれから話し合っていかなければならぬのかなと思いました。

・血と生まれた場所が異なる移民はどう分類されるのか?

戦時中、映画であったように国籍の重要性は高まった。ところが、グローバル化の進む現代ではそれが形而上のものだけであるべきだと思う。しかし、その代わり自己のアイデンティティを(いくつかの国に影響されてもよいが)強く持つべきだと思う。その上で日本人という集団はどう定義されて、いやそもそも定義する必要があるのかという問いはもっと考えていきたい。

・戦時下における移民の処遇はどうあるべきか?

私個人的には移民になったのは自分自身の意志によるものであるため、戦時下で収容されることが嫌、また忠誠心を誓うのが嫌であるのであれば人々は国に帰るほかないと思っていた。しかし、他のグループの人の意見を聞いてそもそも人を国籍で比べるものではない、また少人数のマイノリティを取り入れないのはよくないと意見を聞き、その国としても移民に取っても彼らにとっての人権を守るような対策を行うべきであると考えました。

・○○人(国籍)とは何なのか?

今回のディスカッションを通して、今まで総じて「○○人」と一括りにして呼んできたことに疑問を感じ始めました。そもそも今まで自分が言っていた「○○人」の根拠とは何なのかを考えていくと、単に外見だけを元として判断していたことに気づき、果たして、「○○人」と自分と彼らを区別する必要があるのだろうか、と思いました。よく考えてみると、「○○人」≠その人の国籍である上に、根拠は感情のみであるということに気付きました。相手が何者であるのかは、自分ではなく相手に依存するということを改めて気付かされました。

生徒の記述からわかるることは、どのグループにおいても生徒は対話を通して他者の見方・考え方につれて触れることで、自身の見方・考え方を批判的に反省していることである。同時に、「だからといってどうして中間層(支配者と支配者が見下す対象にした人の間)が下のほうへ流れていかないのか、少数も尊重できる民主主義よりも優れた性質をもった政治体制はないのか、といった疑問も残っています。これらについてもこれから話し合っていかなければならぬのかなと思いました。」「日本人という集団はどう定義されて、いやそもそも定義する必要があるのかという問いはもっと考えていきたい。」という記述か

ら見えるように、生徒の中には今回の授業での対話にとどまるのではなく、新たな問いを自身の中で設定し、探究しようとする態度が見てとれる。また、対話を通して自身の見方・考え方を批判的に反省する者、新たな問いを設定し探究しようとする者とは違った視点の感想として以下のようなものがあった。

- ・今まであたりまえのように見た目だけで○○人と判断してきたが、今回の「移民」に関する話し合いを通して、そもそも○○人と区別する必要があるのか考えさせられた・・・本来歴史は過去の出来事を「どのような?」「なぜ?」のような視点から見ることで現在にも通ずる大切なことを学ぶ学問であると感じた。これから受験が近づくにつれ受験のための勉強になっていくと思うが、その中でも「どのような?」「なぜ?」などの視点を忘れず日本史を学習していきたいと思った。
- ・はじめは班の問い合わせが国籍をどのように取るべきかに重点をおくかと思っていたのに、国籍はくらしやすくするためのただの手段のようで、自分がだれかということは結局見た目や生まれた場所によって、人が勝手に思い込んで決めていると思いました。折角国籍によって人を分類しているのに、○○人についてはそれを使っていないのがとても無駄な気がしました。話し合ったりするのは苦手だけど、普段ぼーっと聞く授業よりもみんなで考えを深める方がたのしいと感じました。「よく生きる」感じがしたので、普段から人と深い話をしたいです。

これらの生徒は、「話し合ったりするのは苦手だけど、普段ぼーっと聞く授業よりもみんなで考えを深める方がたのしいと感じました。「よく生きる」感じがしたので、普段から人と深い話をしたいです。」「本来歴史は過去の出来事を「どのような?」「なぜ?」のような視点からみることで現在にも通ずる大切なことを学ぶ学問であると感じた」という記述からわかるように、今回の授業を通して歴史学習の意義についても自らの視点で学んでいることがわかる。

本授業の目的は、学ぶ意義を見いだせない歴史学習を脱却するために、歴史資料を手段とし生徒が主体的に問い合わせを立て、他者との対話を通して現代社会に対する見方・考え方を広げるということである。生徒が作成した問い合わせの内容や対話の過程、そして対話を終えた後の生徒の感想の分析から、①「歴史資料を手段として生徒が主体的に問い合わせを立てる」という点については、生徒が作成した問い合わせが多様な視点

から作成され、現代社会の事象や問題について対話をすることに意義を見出していること、②「他者との対話を通じて現代社会に対する見方・考え方を広げる」という点については、生徒の感想の中に自身の見方・考え方を批判的に反省したり、新たな問い合わせを設定し探究しようとする姿が見られることが明らかとなった。また、③「学ぶ意義を見いだせない歴史授業の脱却」という点についても、生徒の感想の中に歴史授業の意義について考える姿が見られた。

4. おわりに

今後、次期指導要領においては、生徒が主体的に「見方・考え方」を働かせた課題追究が目指されている。このような中、P4C に見られる対話の手法を用いた歴史学習は、過去の事象としての歴史を生徒が受け身で理解するのではなく、「見方・考え方」を主体的に働かせることで歴史を通して現代社会について考えるものとなる。さらには、この自律的学びのスタンスは授業内外における生徒の学びへのモチベーションを喚起させることに繋がる。これは、授業後においても自主的・継続的に歴史的探究を続ける具体的な視点を提供しうるものとなる。本実践が示した、対話を通じて過去や未来、そして目の前の事象へ想像的に向き合い、そこにみられる問題性を捉え、暴き、自らの立ち位置を反省的に捉える「耳を傾ける」歴史学習は、これまでの歴史学習を改善する一方策となりうるであろう。

一方で、本実践では後景に退いた感のある、歴史(過去の諸事象とそれらが生じた歴史的文脈および因果関係)を学習する固有の意義もまた—「歴史」という個別の科目が存在する以上は—問うてゆく必要があるだろう。著名な近代史家リン・ハントは、近年の高等教育において歴史を学ぶ学生の関心が直近の過去に集中していること、彼らが過去を現在と結びつけて思考する(より強く言えば、現在の価値基準で過去を判断する)傾向性を持っていることを「現在主義」という言葉で表現し、これにある種のジレンマが伴うことを指摘している。すなわち、「現在の観点からのみ過去を眺めるとしたら、私たちの観点を過去に押しつけているにすぎない・・・その場合には、過去は単なる自己の内なる鏡像となり、発掘してそこから教訓を引き出すひとつの時空間で

はなくなる」。しかし他方、「歴史がもし私たちの現在の関心について何も語ってくれなかつたとしたら、全く興味を持たれな」くなってしまう。したがって彼女によれば、「現在主義を適度に保つことが、絶えざる課題となる」のである¹⁵。過去へのアプローチを巡る、この葛藤をはらんだバランス感覚こそが、今後の歴史教育においてはより切実に求められていくのではないだろうか。

¹ レス・バック著、有本健訳『耳を傾ける技術』せりか書房、2014。

² 田中伸・Amber Strong Makaiau「探究学習における対話の原理—グローバル時代における社会科教育研究方法論の提案を通して—」『社会科教育研究』日本社会科教育学会、2018年、pp. 72-85

³ このような学習は、例えば米国ではキース・バートンらを始め、多数の研究がある。(キース・バートン、リンダ・レヴスティック著、渡部竜也・草原和博・田口絃子・田中伸共訳『コモン・グッドのための歴史教育』春風社、2015年)

⁴ 田中伸「社会的リバランスの構築を目指した授業研究の方略—米国社会科教育は子どもの学びへの動機をどのように扱ってきたか—」『社会科教育論叢』全国社会科教育学会、2017、pp. 81-90。

⁵ 例え、サム・ワインバーグ著、渡部竜也完訳『歴史的思考—その不自然な行為—』春風社、2017年、渡部竜也『Doing History: 歴史で私たちは何ができるか』清水書院、2019年など。

⁶ 一例として、鉢悠介「子どもは歴史の何を、なぜ重要だと考えるのか—”Historical Significance”概念の教室への導入に向けて—」『社会科研究』全国社会科教育学会、Vol. 91、2019、pp. 13-24。星瑞希「生徒は教師の歴史授業をいかに意味づけるのか?—「習得」と「専有」の観点から—」『社会科研究』全国社会科教育学会、Vol. 90、2019、pp. 25-36などがある。

⁷ 田中伸・辻本諭・前田佳洋・矢島徳宗「教師・歴史学者・社会科教育学者が協働した授業のゲートキーピング—歴史学の思考・方法を活用した解釈を主体とする歴史教育実践-」岐阜大学教育学部研究紀要、67巻第1号、2018年、pp. 41-53。

⁸ ゲートキーピングについてはスティーブン・ソーントン著、渡部竜也、山田秀和、田中伸、堀田諭共訳『教師のゲートキーピング-主体的な学習者を生む社会科カリキュラムに向けて-』春風社、2012年参照。また、教師が同じテーマをゲートキーピングした授業については、田中伸・前田佳洋・矢島徳宗「社会科教育実践における教師のゲートキーピング -消費者市民社会の構築を目指した学校と社会のコミュニケーション-」『岐阜大学教育学部研究紀要』第65巻2号、2017年、pp. 37-49 参照。

⁹ 近年の包括的な研究として、山田史郎・北村暁夫ほか

『近代ヨーロッパの探究① 移民』ミネルヴァ書房、1998年；杉原薰編『岩波講座世界歴史⑯ 移動と移民—地域を結ぶダイナミズム』岩波書店、1999年；永原陽子編『人々がつなぐ世界史』ミネルヴァ書房、2019年、IV、V部を挙げておく。また本論文執筆にあたって、塩出浩之『越境者の政治史—アジア太平洋における日本人の移民と植民』名古屋大学出版会、2015年；松本悠子『創られるアメリカ国民と「他者」—「アメリカ化」時代のシティズンシップ』東京大学出版会、2007年、ロジャース・ブルーベイカー(佐藤成基ほか編訳)『グローバル化する世界と「帰属の政治」—移民・シティズンシップ・国民国家』明石書店、2016年から筆者は大いに示唆を得た。

¹⁰ 具体的な研究については、田澤晴子・辻本諭『満蒙開拓団の体験を学校教育でどう教えるか—日本近代海外移民史の学習を踏まえて』『岐阜大学教育学部研究報告(人文科学)』68巻2号、2020年、29~37頁を参照。

さらに、村川庸子『境界線上の市民権—日米戦争と日系アメリカ人』御茶の水書房、2007年；島田法子編『写真花嫁・戦争花嫁のたどった道—女性移民史の発掘』明石書店、2009年；日本移民学会編『日本人と海外移住—移民の歴史・現状・展望』明石書店、2018年；田辺明生ほか編『環太平洋地域の移動と人種—統治から管理へ、遭遇から連帯へ』京都大学学術出版会、2020年も参照されたい。

¹¹ アメリカ大陸への日本人移民に関する文献(当事者／関係者による著作を含む)は、アケミ・キクムラ=ヤノ編(小原雅代ほか訳)『アメリカ大陸日系人百科事典—写真と絵で見る日系人の歴史』明石書店、2002年において網羅的に紹介されている。

¹² 貴堂嘉之『移民国家アメリカの歴史再考—ヘイトの時代に歴史学ができること』『歴史学研究』989号、2019年、12~21頁。また、二井正浩『『他人事』から『自分事』の学びへ』『社会科教育』739号、2020年、4~7頁も参照。

¹³ 近年進みつつある移民の授業化の試みにおいては、移民の「語り」を教材化することの有効性が、それが児童・生徒の「移民に寄り添った視点」を引き出し、「移民と同じいま・ここを仮想的に共有する」ことを可能にするという点から指摘されている。(石川寛輔「社会科教科書における日本人移民・日系人に関する記述の変遷—グローバル時代の移民教材に向けて」森茂岳雄・中山京子編『日系移民学習の理論と実践—グローバル教育と多文化教育をつなぐ』明石書店、2008年、所収。) この点を踏まえ、本実践では小説とドラマを教材として採用している。

¹⁴ M. R グレゴリー他著、小玉重夫監修 豊田光世、田中伸、田端健人訳者代表『子どものための哲学教育ハンドブック—世界で広がる探究学習-』東京大学出版会、2020年。

¹⁵ リン・ハント(長谷川貴彦訳)『なぜ歴史を学ぶのか』岩波書店、2019年、103~105頁。